

## 書評

都留重人，大川一司編  
『日本經濟の分析』

勁草書房 1953年 322頁 360圓

## 1

この書物にもられた日本經濟の發展過程の實證的分析をめぐす一橋經濟研究所の研究プログラムの成果は、どんなに高く評價しても、高すぎるということはあるまい。日本の經濟學界には、久しく埋められるべくして、埋められていかなかった穴があった。それを埋めようとする努力への第1歩が、はじめてふみ出されたという感じである。まさに劃期的な仕事であるといつてよい。

いくども云いふるされたことではあるが、外國の土壤から直接に日本に移植された經濟學には、日本の現實の問題から遊離するかたむきがあった。經濟學が不毛だという非難にこたえるには、この現實との橋渡しは、いつかはこころみなねばならない仕事であつたらう。この意味で、理論的モデルなり、假説なりを、日本經濟の分析に適用しようとする試みがなされたのが、ひとつの重要な點である。しかし、それだけではない。たんに假説を統計的に檢證するというだけではなく、假説自體が、現實の鏡にてらして再檢討される。外國の經濟事情を反映した理論の立て方が、そのままでは日本の經濟發展を説明するには不十分だということから、あたらしい方向にふかめられ、細かく彫琢されることもあらう。パラメーターの推定という作業を通じて、モデルが作り直されることもあらう。一般に、經濟理論が發展するのは、こういう現實との對決の過程をつうじてである。もっとも抽象的な理論的努力でさえ、この例外ではない。この面にこそ、一橋經濟研究所の研究プログラムがもつ積極面がある。資料の不整備というハンディキャップから、統計的檢證自體に不満足な點がのこるとしても、この理論のための積極的な努力は、高く評價されねばなるまい。日本の經濟學界が世界にあたえうるなものかがありうるとするならば、これ以外の方法では、さがし出すことさえできないであらう。

この共同研究は、直接には、研究所が擔當した東京商大における昭和27年度のセミナー講義の内容をなしたものであるが、その基礎には、まえからの研究所の絶えない研究努力がある。昭和26年の初頭から『經濟研究』誌上に續々發表されている研究の成果が、それであ

る。こういう忍耐づよい、地道な努力が、本書にみのつたという事情は、とくに注意されねばならない。まことにうらやましいのは、日本の學界ではあまり例のない、共同研究の雰囲気であつて、この書物を注意ぶかくよむものは、行間ににじみ出ている各研究者相互のあいだのあたたかい精神的交流に打たれないではないであらう。日本の學界がこの點でおくれをとっているということが、よくなげかれるのであるが、それだけでも、重要な實驗たるをうしなわない。

しかも、この研究は、いま、多くの成果を約束する仕方で、ますます先きにすすめられつつあるようだ。すでに『經濟研究』誌上に發表された諸論策と本書とを比較しても、このことはあきらかにみてとれる。本書を構成する6つの章の立て方からみると、日本經濟の長期的な發展をつかもうとする大きな視角には、かわりはないが、たった一つの論文を別として、すべてあたらしい角度から問題が整理されているほか、とくに全體の基調として、産業別の分析というか、構造という觀點が、つよく前面に打ち出されてきている。これは、日本經濟の分析にあたって、だれもがつよく意識しなければならない重要な觀點であらう。きくところによると、すでに同年度の研究成果にも、本書におさめられた倍量のものがあったという。續卷の刊行を期待したいものである。

この種類の勞作にたいしては、使用された具體的な數字や、統計的處理の方法についても、綿密な檢討や評價がなされねばならない。しかし、ここでは、そうした面よりも、むしろ、發展過程の分析に役立ち得る理論的假説とか、理論的分析の立て方、その成果の評價とかいう問題に重點をおいて、若干の讀後感をしるしてみたいとおもう。

## 2

本書にもられた研究は、全體として、一口にいえば、ハロッド、ドマール流の成長率理論の日本經濟への適用にほかならない。ところで、經濟の長期的な發展を問題とするばあいに、まずはっきりさせておかねばならないのは、異時點間の經濟諸量を比較するという價值尺度の問題である。本書では一般に、ハロッドの手法にしたがつて、價值の財貨尺度がとられ、すべての經濟諸量が、リアル・タームではかられる。これは、基本的な筋みちとしては、あるいは一應の接近の仕方としては、論議の餘地なく正しい方法である。しかし、一步すすめて、成長のメカニズムをあきらかにしようとするならば、われわれは、ただちに困難にぶつかるであらう。

ひとつの重要な點は、大川氏が正しく指摘しておられ

るように、消費水準の實體的な内容、またはその様式であり、その基礎には、マネー・タームにおける生計費が、相対的に低くたもたれるという事情がある。消費水準をリアルな内容においてつかむことも、不可能ではないが、その具体的なあらわれ方は、どうしても価格を媒介として把握する以外にみちはない。しかも、ひとつの客観的基準、大川氏のばあいには國際的な基準にてらして評價するときには、マネー・タームにおける量とリアル・タームにおける量とが、相対的に乖離してこななければならない(225頁)。このメカニズムをつかむことが、發展の巨視的分析においては、この上なく重要なこととなろう。都留氏が指摘しておられる持続的な物價騰貴の傾向(18頁)は、また別の關連で、中山伊知郎氏が日本經濟の發展の特質として注目されたところでもあるが、このインフレ的傾向が經濟の成長におよぼす影響もまた、貨幣的メカニズムの分析を通してのみ、解明されうるであろう。わたくしはかつて、國民的な規模における貨幣所得と實質所得との相対的乖離に、動態的國際經濟學の鍵を見出したのであるが<sup>1)</sup>、おなじことが、一國の經濟成長の動態にもあてはまる。

ジョン・ロビンソンの動態理論への志向も、わたくしの解釋では、そこに求められる。それだからこそ、彼女は、價值尺度として、財貨單位ではなしに、ケインズの賃金單位をとったのであろう。そして、いうまでもなく、日本のような經濟構造においては、貨幣價格と貨幣賃金との平行的なうごきを假定することは、まさに分析されるべき問題の焦點をみのがすことになる。そのかぎりでは、たとえば篠原氏が、一般にポスト・ケインジアン<sup>2)</sup>の行き方にならって、雇用なり、貯蓄なりを、實質所得の函数として指定するばあい、その前提に何がふくまれているかを、よく吟味してかからねばならないようにおもわれる。とくに雇用の理論においては、當初のケインズの賃金單位による推論にかえるべきではなからうか。もっとも、篠原氏自身、この問題のありかには、十分な考慮をほらい、分配率決定の方程式を價格効果を入れて修正しておられるのだから(172頁)、結論にかわりはない。

本書のなかで、理論的に重要な、もっともブリリアントな構想は、おなじ篠原氏が展開しておられる生産と所得の乖離をふくんだ成長メカニズムの理論(48頁以下)であるが、これもまた、わたくしが指摘した動態メカニズムのひとつの表現にほかならない。リアル・タームに

における生産の成長率と、價格體系の變化に影響される所得の成長率とがお互いに乖離するのが、ここでの問題の焦點だからである。この着想の理論的に重要なふくみは、いかなるタームではかられるにせよ、從來の動態モデルが把握した事後的な函数關係のそとに、物量的な生産力効果を獨立に考えることにあるのだが、この點については、のちにふれる。この書物では、残念ながら、モデルがつくられただけで、このふくみがまだ全面的に展開されてはいない。いずれにしても、これは、たんにグロスの量とネットの量との乖離としてつかむのでは、十分ではない。むしろ、成長のメカニズムにおいて、重要な意味をもつのは、實質賃金の成長率をはるかに上まわって、生産性が增大するという事情であろう。この面から、さきの生産と所得との乖離も、理解されねばならない。これは、綿密な計算をこころみた上での結論ではないが、梅村氏が本書(249頁)であたえた數字からしても、そのような長期的な傾向が、よみとれるのではないかと考える。

## 3

本書におけるように、ハロッド流の動態理論のモデルを、日本經濟の長期的な發展過程にあてはめようとする試みにおいて、われわれは理論のためになにを學ぶことができるか。わたくしはかねがね、いままでの成長率の理論が、あくまで均衡分析のワクのなかにとどまっていることに不満をかんじ、そのようなモデルが、現實經濟の分析にあたって、破綻を経験しないであろうかという疑いをもっていた<sup>2)</sup>。本書にもられた勞作の多くは、わたくしの疑問をうらづけてくれたようにおもう。

まず、一橋經濟研究所の研究者たちは、あたえられた基礎的條件のもとで、いかなる經濟の成長率が維持されるかというハロッドの問題提起にとどまらずに、一步すすめて、いかなるメカニズムによって、過去にみられた經濟の成長がおこなわれたかをも、分析しようとした。これは、あきらかに、成長過程の發生的な動因分析にもつうずる正しい問題の立て方であり、ここから出發してのみ、基礎的條件がかわるばあいに、いかなる成長の態様が期待されるかという將來への見透しも、はじめて問題になりうるわけであろう。

このメカニズムを考えるにあたって、篠原氏は、さきののべたように、生産と所得との乖離にぶつかった。ハロッドの考え方では、純投資は、直接に實質所得に關連

1) 著者、小島清譯、『國際貿易理論の基本問題』、原著 1941 年、邦譯昭和 24 年。

2) 拙稿「動態的國際經濟理論のために」、『經濟研究』第 4 卷、第 2 號、182 頁参照。

づけられる。あるいは、もっと正確にかれの動態の基本定理を解釋するならば、純投資は、實質所得の函数としての貯蓄に、ひとしくおかれるのである。しかし、動因的に考えるならば、投資はなによりもまず生産設備の増大とみることができであろうし、それは直接に、物量的な生産數量をたかめることになる。ここにドマールによって指摘された投資の生産力効果が、たくみに経済成長のモデルにとり入れられる。

投資と貯蓄との事後的一致から出發せずに、投資の生産力効果から出發すると、動態モデルの性格は、まったくかわる。いままでのように、貯蓄率そのものが、経済の成長過程にたいして、なにか基本的な役割を演ずるのではなくて、物量的な生産量の成長をはじめて可能にする投資が、理論の焦點にうかびあがる。投資といっても、もはや、経済の循環過程でいろいろちがった機能をはたすあらゆる種類の財貨ストックを、十把ひとからげにしたものではない。資本蓄積の理論には、たしかに、こうした資本の形態學的な機能のちがいを、反映させねばならない。本書においても、高橋氏は、すでに生産能力という概念が、資本形成の分析に缺くことのできない意味をもつことをみとめておられるようである(152頁)。ジョン・ロビンソンが、動態のモデルをつくるにあたって、資本能力の問題、したがって、貯蓄との関係でみられた資本需要を中心軸においたのも、おなじ理論的焦點をめざすものと考えてよい。そうしてこそ、はじめて動因分析に耐えうる成長の理論が作り上げられるであろう。

この高い立場に立つとき、均衡分析のワクのなかにとどまる長期動態理論のおとし穴は、あまりにもあきらかである。そこには、投資の理論がない。資本係数の變動を説明する假説もありえない。大川氏も正しく指摘しておられるように(24頁)、その變動を長期的にとり扱うまでにはいたっていない。それとならんで、こういうこともいえる。長期的には、資本係数は、比較的安定した値をもつものだろうが、むしろ重要なのは、稼働資本能力と産出量の相互變動にもとづいておこる資本係数の短期的な變化であろう。

實はこの點が、サイクルとトレンドとの関連を理論的にときほぐして行く重要な鍵であろうと考える。たんに特定のトレンドを假定して、その上にサイクルをのせて説明して行く行き方だけでは、動態の基本的な問題にせまりうるとはおもわれない。むしろ、サイクルそれ自身のなかから、トレンドをうごかす力をみちびき出すのが理論に課せられた重要な課題であろうが、このシュムペーターの問題にこたえるには、まず成長のモデルそのもの

を立て直してかからねばならないのではなからうか。

本書は、讀む人が讀めば、まことに重要な示唆をあたえてくれる。ほかの部分にくべらて、資本蓄積にかんする章が、とくによわく感ぜられるのは、理由のないことではあるまい。投資統計が不十分であるために、國富統計や金融統計にのみたよらねばならないのは、いまのところ、何ともしがたいことかもしれない。それにもまして、投資、それもさきへのべた形態學的な機能をもつ資本形成が、何によつて決定されるかという理論がないのである。そういう意味の投資のにない手である企業の行動について、われわれはいまだ十分な假説さえももち合わせていない。これは、たしかに統計的實證の問題ではない。それは、理論自體がはたすべき課題であろう。ただ、現實の分析にぶつかって、理論自體が反省を迫られるというのは、経済學にとって、まことに貴重な教訓ではないだろうか。

なるほど、日本經濟の成長率は、例外的とはいえないにしても、非常にたかい。この成長率の大きさを、それぞれの國のおかれた發展段階に関連させて考える立場にたいして、本書では、はっきりした解答があたえられてはいない。(たとえば、42頁)もっとも納得の行く説明は、おそらく、投資機會というか、資本需要の弾力性に眼をそそぐことであろう。投資を中心とした成長理論は、この問題にも、光を投ずることができる。日本の資本係数が、資本化のすすんでいるはずの米英の正常値よりも大きいということ(226頁)も、この研究プログラムでは、まだ解決されていない謎である。こうみてくると、一般に資本形成の面にこそ、長期的動態理論の克服しなければならぬ隘路があることは、ほぼ疑いのないところのようだ。

## 4

本書にもられた勞作の多くは、論理的にエレガントな解決というよりも、ゆたかな經濟的現實への直観になられた第一級の理論的努力の結晶であるが、そのためであろうか、日本という國の特殊な經濟構造が、つよく關心の中心におかれるようになった。これは歓迎すべきことであろう。日本經濟の特質は、いずれにしても、構造という面からつかむのが、早道だからである。

成長のメカニズムを追及して行ったところに見出されたのは、傾斜的な發展、不均等な成長過程であった。一般に、總括的なアグリゲートの量をもつては、日本經濟の特徵的な發展過程にせまることはのぞめない。成長率にしても、分配率にしても、生活水準にしても、本書を通じて、すべて産業部門別に計數がまとめられ、その

あいだに理論的な関係が確立された。日本経済の特質として、よく生産水準と消費水準とのギャップが指摘されるのであるが、それもまた、都市と農村、工業と農業という異質的なグループから成る構造を媒介としてのみ、説明される。もうひとつの謎である労働所得の相対的な低位ということにしても、そうであろう。相対的に低い第一次産業の生産力の上に、はじめてきわ立って高い全體としての成長のテンポが維持されえたという、ある意味では逆説的な関係も、こうしてはじめて理解される。

ところで、構造という視角は、ながいあいだ近代の経済理論から、まったくすてられていた感じがある。(95頁)だから、構造分析を理論のなかにくみ入れる努力も、ここでは、模索的に、主に統計的實證をつうじて、ころみられているにすぎない。よりどころは、コーリン・クラークのいうベティの法則であるようだが、産業の分類にあたっては、もっと周到に、経済循環における機能を考慮に入れた検討がのぞましい。この意味で、大川氏自身基本的な意味をもつとみとめておられる生産財生産と消費財生産とに分けての計測を、まとめ上げるような方向への努力に、期待したいとおもう。そして、構造の視角が、有機的に経理論のなかにくみ入れられるには、構造的に規定された経済のうごく姿、いろいろな函数の特殊な値というものを媒介にしなければならない。わたくしは、この方向への有望な萌芽を、本書の第2章に見出し得るように考える。

最後に、理論の立場から、この實證的研究に學ぶべきことは、あらゆる假説の一面性ということではないかとおもう。理論が假説を立てるばあいに、それは、つねに、あたえられた課題からみた一面のみを、現實からとり出すのであって、もしわれわれが、たったひとつの理論だけを公式的にうけ入れて、他のものを機械的に排するならば、それこそ「論語讀みの論語知らず」に墮す危険があろう。時には、體系の論理的一貫性ということには、それほど重きをおかずに、現實の問題にいろいろな考え方のシェーマをあてはめてみるのが、あどろくべきほど有効な結果にみちびくこともありうる。もちろん亂用してはならない。本書の一部には、そういう偏向があるかともおもわれるが、近代理論でカヴァーされていない多くのあたらしい分野に、一步をふみ入れたという點で、この研究プログラムは、古典的な理論に、いままでの評價とはちがった地位をあたえようとしているようである。

そのひとつのばあいとして、馬場氏の勞作をあげることができる。これは、貿易理論の面で、ケインズ學説と古典派理論とをむすびつけようとした、きわめて獨創的な試みである。貿易乗數論においても、交易条件が大き

な役割をはたす。これは理論的に重要な點である。所得効果もまた、古典的な價格効果とむすびつけてのみ理解されるという、最近のヴァイナーの立場につうずるものといってもよい。ただ、ケインズ學派の瞬間的な形の乗數論の解釋には、なお多くの問題がのこるであろう。

そのほか、生活水準の長期動態的な把握にさいしては、古典派の生存水準の概念が要求され(212頁)、長期の賃金理論のためには、近代理論にまったく缺けている長期の人口論が、不可缺の要素と考えられる(237頁)。あるいは、分配率を考えるばあいに、研究者たちは、近代的雇用理論を補うものとして、どうしても古典派的な分配理論の助けをかりなければならぬという立場をとる。(172頁, 205頁)

これらの指摘を、近代理論への挑戦と考えるべきだろうか。おそらく、そうではあるまい。日本という國の経済の特殊な型という問題もあろう。いずれにしても、ここに現實からする理論への挑戦がある。これからの経済學のすすむみちに思いをいたすものなら、だれでも、眞剣にこの書物ととりくんで、考えさせられることが多いにちがいない。それが實は未完成の、しかし大膽な構想になるトルソであるからこそ、まさにそうなのである。

(喜多村 浩)(1953・10・29)

杉 本 榮 一

### 『近代經濟學史』\*

岩波書店 1953 326頁 280圓

故杉本教授の絶筆である本書は、教授が生前心血を注いだものであったけれど、教授じしんにとっても心残りのない出来であったとは云いがたい。限られた紙幅と目的のわくのなかのものとしては、たしかに本書は十分にその目的を達しており、教授の造けいのほどと學問的熱意の深さを想像させて餘りがある。また教授が、かなりしばらく前から自らの課題としていた理論上のいくつかの問題を、ほとんど大部分、學史的背景のもとに展開してもいる。どんなに小さなことをもゆるがせにしない細心さと、樹にとらわれることなく森をみる大局的見地とを見事に綜合した本書は、たしかに教授の學問の風格をあらわすものとして、後進に教えるところがきわめて多い。そうであるだけに、本書を點綴しているいくつかの獨創的な見解については、教授にいますこしの時をかし、もっと體系的に且つ誤解の餘地のないよう肉付けも

\* 本稿は紙面の都合により、予定よりも短くせざるをえなかったことを、おことわりしておきたい。